

Language B (English) 指導の改善と課題

西 智子
永井 智大
柏柳 航
松田 香織

1. 要旨

English B では英語圏の文化を理解し言語的な運用能力を高めることで、英語で効果的にコミュニケーションをとれるようになることを目的としている。本校ではHL、SLを設置し、1年次の12月までPre-English Bとして週5時間、DP開始の1月からHL週5時間、SL週3時間の授業を実施した。本報告書では、前年度の14期生の取組みを踏まえた15、16、17期生に対する取組みの改善と今後の展望について述べる。

2. 新しい取組み

令和4年度において、English Bを担当する教員は4名おり、昨年の14期の取組みを改善しながら、教員間で協同しながら指導にあたった。14期生では英語ネイティブ話者が担当として在籍していたが、15期生以降は、日本人教員のみで担当している。Language B guide First assessment 2020に沿って、Paper 1、Paper 2、Individual oralの評価に焦点を置きながら指導を行うことを基本とし、さらに改善に努めた点について言及していく。

2.1. 外部評価 (Paper 1: ライティング、Paper 2: リーディング、リスニング)

Paper 1 過去問が少なく、HLとSLとで難易度が異なるタスクに対応する練習がより必要であったことを受け、17期生では、最終試験に似せたライティングのタスクを作成し、生徒に課すことで、より実践的な学習を積み重ねられるようにしている。本校で採用しているOxford University PressのIB English Bの教科書では、HLとSLのタスクが、分かれておらず、最終試験で求められることとギャップがある。そこで、教員が修正を加え、より最終試験に近い形式でPaper1の練習を行えるようにした。このことにより、生徒は学習の初期段階から、最終試験を意識したトレーニングを積むことができるため、その成果に期待している。

Paper 2 リーディング 14期生では多様な英文に触れる機会の不足が課題であった。そこで、ReadTheory (Free Reading Comprehension Practice for Students and Teachers)と呼ばれる、WEB上のリーディング教材を活用することにした。生徒は、各自のレベルに合わせたリーディング問題に取り組むことができるため、徐々に読解力をつけていくことができている。15期生が約1年間継続した結果は、成長が著しい生徒でGrade Levelを3学年分アップした。平均的には、1～2であった。3年間の取組みは今後成果として、数字に表れることを期待している。

Paper 2 リスニング 本校におけるリスニング試験の実施が 2022 年 11 月に初めて行われた。授業内で定期的実施するリスニング練習に加え、3 年次、最終試験の数か月前には集中的にトレーニングを行った。特に、生徒が苦手なイギリス英語を中心に、複数の英語でのリスニング問題に取り組んだ。リスニングは、トピックにより生徒の得意不得意が表れるため、バリエーションの幅を持たせて教材を提供したい。しかし、適切な時間と設問の教材の確保は容易ではない。蓄積しながら、最新の教材を活用できるように教員間の協力をさらに強めていく。

2.2. 内部評価 (Individual Oral)

内部評価に関する新たな取組みは大きく 2 点ある。発音指導と英語圏文化理解の強化である。

14 期生、15 期生の IA を指導し、実施する中で、発音、イントネーション、アクセントの重要性をより実感している。17 期生では、14 期生でも行った発音指導に加え、音の変化や日米の発音の違いについて指導を行うことで、生徒のリスニング力と発音の向上を目指している。発展的なアイデアや語彙があるにも関わらず、リスニング力や発音が原因で十分にコミュニケーションがとれなくなることを防ぎたい。

また、SL の内部評価に関して、英語圏文化に精通する必要があるため、トピックごとに関連する文化的側面を明示的に取り上げ、ディスカッションに取り入れている。一つのトピック、例えば、technology に関しても多岐に渡る文化的な側面があり、教員からある程度提示する必要があると考えている。その結果、ディスカッションの焦点が定まり、より具体的かつ発展的な議論となることを促している。

2.3. 語彙に関する取組み

16 期生では、新たな試みとして、Academic Word List (AWL) 570 語を活用して、よりアウトプットにフォーカスした取組みを行っている。定期的なテストを実施したのち、10 分程度のアクティビティーを行うことで、語彙がより定着することを目指している。毎回異なるアクティビティーになるように工夫しており、生徒の関心も高いため、アカデミックな語彙を使う意識が向上している。

2.4. 文法に関する取組み

14 期生同様、1 年次から 2 年次にかけて計画的に Vision Quest Ultimate を活用した、Grammar Test を実施している。教科書では体系的に文法を扱うことがないため、ライティングでのフィードバックの際、間違いを指摘し、参考書での学びを促し、実際に文法を使う場面を意識した指導を行った。

また、新たな試みとして、生徒と教員間で、Paper1 の評価基準 A における complex grammatical structures とはどのような構文であるかの、共通理解を持つとともに、生徒に、より丁寧な文法指導を始めた。毎回の Grammar Test の後に、発展的な文法事項を解説することで、生徒が Paper1 や内部評価で complex grammatical structures を活用できるようサポートしている。

2.5. イディオムに関する取組み

第二言語として英語を学ぶ者にとって、ニュアンスを効果的に伝えることができるレベルになるには、イディオムの活用は不可欠であり、評価基準にも明示されている。引き続き、イディオムを使つてのスキット発表は行っている。また、教員からの発話にイディオムが含まれるよう努めている。語彙の定着とアウトプットには反復が必要であり、文脈から学ぶイディオムは使用場面を増やすことが一番であると考えている。

3. 授業計画の共有について

私たちは3年間の指導計画を立てたうえで、さらに詳細な計画を立て、教員と生徒で共有しながら授業を進めてきた。少なくとも半年先の見通しをお互いが共有している。また、担当する教員が増えるにつれて、より教材や授業計画の共有は重要になる。この点においては、引き続き行っていく。生徒に対しても透明性のある指導を意識することで、生徒の自己管理スキルを高める支援をしたい。

4. 課題と展望

昨年の課題として、1. 言語、2. 文化、3. 概念理解、4. テーマの4つをあげた。

1. 言語の課題は、多くのトピックとテキストタイプを学習する中で、どの程度具体的な言語指導ができるかが課題であった。今年度より、語彙の指導にバリエーションを持たせることで生徒の意識を高め、また、文法・発音指導においてもより明示的で丁寧な指導を試みている。生徒が実際にアウトプットできるように2年後、1年後の成果に繋げていきたい。

2. 文化の課題は、複数の英語圏における膨大な文化的側面をどのように伝えていくかであった。教員が特定の文化的傾向に焦点を絞り、ディスカッションに活用することで、具体的な文化面に言及できるような指導を始めた。教員として第二言語を学ぶ姿勢を再認識する機会となっている。

3. 概念理解の課題は、言語のニュアンスを含む「適切さ」の指導である。イディオム習得をはじめ、生徒だけでなく、教員にとっても挑戦であるが、ネイティブスピーカーと協力して、まずは、教員から発信できるように努めている。今後も、引き続き精進する。

4. テーマの課題は、教科横断的な学びを進めることであった。教員間での連携にはまだ課題が残るものの、生徒に、他の教科で学んでいることと、English Bでの繋がりを問うようにしている。気づいたことを共有するだけでも、生徒は学びの関連性に意識を向け始める。特に、English Bでは、関連性は一つのキーワードであると考えているので、意識づけのため、発問は続けていきたい。

新たな課題 — All English の環境

1年次の初期指導において、英語だけで過ごす授業に慣れることが重要である。14期、15期生ではあまり見られなかったが、16期、17期の生徒によっては、英語の単語が出てこないため、日本語になってしまうことがある。そのような場合には、必ず知っている言葉で、自分が言いたいことを伝えるように指導している。「えっと」、「うん」などの些細な filler words から日本語に戻ってしまうこともあるため、初期段階で英語での

filler words の指導も今後は重要になってくるだろう。教員側から All English の環境に馴染むよう雰囲気作りに努めたい。

現在、English B を担当する教員全員が課題意識を持ち、その改善に課題に丁寧に取り組んでいる。これらの取組みの成果は、数年かけて検証する必要がある。課題意識を常に共有し、新たな取組みに挑戦していきたい。そのためには、教員のスキルアップと経験は不可欠である。ディプロマプログラムは、教員の経験に基づいた判断も重要である一方、その経験が挑戦の妨げにならないように、常に最善を尽くす姿勢で臨みたい。

言語習得には毎日の積み重ねと、本人の絶え間ない努力が必要である。その成果は、外部試験等でも数値として評価されるため、進学において、明確な目標値が設定される。英語のスキルは急激な変化を期待することが難しいため、生徒には1年次から着実に歩みを進めてほしい。海外進学だけでなく、国内進学においても英語は常に重要な要素であり、English B が担う役割を意識して、担当教員全員で取り組んでいきたい。

最後に、本校での安定的な科目提供の点において、教員の育成は不可欠である。現在の担当者の異動も視野に入れ、新たに English B を担当する教員の確保を進めていくことは必至である。